
逝きたい人・へ

香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逝きたい人・へ

【NZコード】

N1028A

【作者名】

香

【あらすじ】

わたしは公園でたまたま知りあつただけの不良に惚れてしまいます、彼と付き合うことで怖いことも沢山知つていきます危ないことも沢山知りましたでも、幸せでした逝きたい人、人を愛せない人、信じることが出来ない人に読んで欲しいです少しでも何か感じていただけたら幸せです

第一部

桜舞ウ入学式ノ日

私は公園でせせこましく挨拶をしている母を尻目に少し曇りがちな空を見上げた

こんな日くらい晴れろやね…

罪も無い天候に悪態をつきながら買つたばかりの携帯をいじる新着メールナシ

寂しさが増す。

おめでとうぐらい言つてくれる友達はおらんのかや…

鼻と口から空気がありつたけ漏れる。

新しい制服も着て一時間で飽きた。

汚れようがシワになろうが気にもしなくなり、地べたに座りこむとヒンヤリとした冷たさが背筋を震わせた。

母はまだ来ない

挨拶から井戸端会議へと変わった母達の姿はシバき倒したいぐらい

楽しそうだった。

後が怖いからやらなきけど…

そのとき

『なんしちゅうが?』

「…は?」

後頭部から聞こえた外国語…でわないが理解できない方言にマヌケな声をあげる

と、同時に振り返ると…

派手な金髪が目に入る。

しかも逆さまで…座らすにもたれかかっていたベンチに人が座り話しかけて来た。

しかも…男。

そして…不良…さん?

『 聞いとん？』

「 はい？」

首だけ後ろに反り逆さま、ダレた生首…に見える男と目が合つ

…キツネ？

男の第一印象はそんなもんだった

「 なんて言つたの？」

…やばい…タメ語だよわたし…

『 だけん、何しちゅうがあ？』

理解できた。

「 何もしてない…ですよ」

『 そなん？暇なん？』

微笑とも言い難い中途半端な笑顔でわたしを見る。

まだ母は来ない…しばらく話した結果、金髪パツと見不良キツネ男は広島人で友達の里帰りに興味でついて来てこの街にたどり着き観光中らしい。

…話し方は友達のが移るらしい。

わたしの知らない世界にあまり興味はなかつた…が。

逆さまキツネは実はたれ目で…まともに見ると…かつこいい。 キ

ツネと言つよりは…子犬？

急に興味が湧いたのは顔だけではなかつたことを弁明しておいつと
思う。

バイクがあつた。

カワサキと書いてある。大きく、かつこいい青いバイク

彼はよほど暇らしくわたしなんかに話し相手を求めて來た。無謀な
人だった。

しかしあたしも暇人だった

彼の押しもあり…

母に電話。あつさり了解を得た。子を思つ母の愛情に悩んだ

ちょっとは

心配しろよ 『 ねえ、名前なんて言つん？！』

「 …え？！」

『なまえ!!』

「……なんて！？」

(ゴシツ)

「痛つつ！？」

『名前じやダボ』

「…かおりです」

『クドいわダボ』

「聞こえなかつた」

『どんな漢字?』

「
？」

9

「めん聞いてなかつつ」

(ガツコツツ)

「痛つ！痛い！！」

今わたしはバイクにまたがり生まれて初めての二ヶツを体験している。

男の運転は荒く 体全体でものすごいスピードを感じ
気分は…悪くない

まあ、信号で止まつた後のわ自分の不注意だけど

あと、タボとはバカの意味を示しているらしいが、た

ハ三ハニ共雪バ丁度、ソレハシヨウアニヤリモト

わたしが降りると男も降りて、自販機に向かつた

わたしは公園に入りブランコに座ると田に入る子供達の観察に集中していた

おれのことをたまに田舎にじめ子が座っていて歌うのを聞くと口圓子

もどっこい餓を待つでいるにしかった
微笑ましく、癒やしゃんなあと考えてた最中

(「ロラシ）

「……」

『アレ食べたいんか？』

『何すんの……』

『んつ』

『くれるん？』

『2つはのまんやう普通』

『気持ち悪……』

『あ？』

「ゴメンナサイ」

『違う』

「…アリガトウゴザイマス」

『素直に飲めや』

「あい」

『…で？かおりの漢字はどうんなやつなん？』
『えとね、香水の香に布を織るの織だよ』

『良い名前やな』

『香りを織るんや』

『ありきたりでいやだよ』

『いいやん？綺麗な名前やと悪いで？かおり、』

『…』

『何？』

『いや……』

『何？俺に惚れたんか？』

『は？』

『俺モテるけのお』

『あ？』

『恥ずかしがらんでええけつ』

『有り得ない～』

『そうなん？』

「キシリ…」

『…ああ?』

「何でもナイデス」

『面白いやつちやなあつ』

「喜んで頂いて結構ですわ」

気がついたら隣のブランコに腰を下ろし炭酸飲料を飲んでいた。名前が綺麗だなんて…言われたの初めてで…気恥ずかしかった…顔が赤くなつてないか不安になつた…涙が出そうになつた…

自分がわからなくて…怖くなつた

そつけない態度で自分をおさえこんだ。なんなんだろ…それからはいろいろあつた。子供にまざつて砂遊びしたりバイクの乗り方を教えてもらつたり、楽しくて、時間が過ぎるのが早かつた…

夜7時を回り…家まで送つてもらつた…なごり惜しくて…わたしから番号を聞き、別れた。明日広島に帰るといつていた…

PM11:00

携帯を見てしまつ、かかつてくるはずも無いのに

AM01:00

眠れない。今日の男のことを思ひ出しあしまつ

AM03:00

起きてるはずはないと思い、少しだけ鳴らしてみると…

緊張する。ホール音が耳に響く

3「ホールめに、怖くなつて切つた。なぜか罪悪感がある。もつ寝よつと布団に入る

AM04:30

着信に気づく。

切れた。

ビックリして携帯をみると…あの男だった

嬉しさで頭が真つ白で、言い訳を考えて無かつた…

電話がつながると、『『どがいしたんだ?』』と言われ急に困った。

『なんかあつたんか?』

「こや…」

『おこ?』

「なんしてるかなつて思つて…?』

『は?』

「…」

『今なんじよ?』

「4時…45分ですね」

『なんかあつたんか思つたがよ』

『電話しても出んしな』

「あー…『じめんなさい…』

『なんや?暇やつたんか?』

『起きてるとは思わなかつた…』

『悪かつたな起きてて』

「いや…ビックリした」

『…今日楽しかつたなあ』

「あ?あ…うん」

『何あれだけ奉仕してかおりは楽しいなかつたんかあ?』

「楽しかつたです」

『やんなつ』

「名前」

『は?』

『名前聞いてない』

『言つてなかつたけえ?』

『聞いてないわダボ』

『ノノヤロ』

『…かずまわ』

「へ?かずまわ?」

『そう、かずまわ』

「：どんな漢字？」

『和風の和に大将の将』

「へえ……強そうな感じがする」

『やがては俺強ししれ』

『

「ゴメンナナイ。」

『わざとやつたんか』

「あー、うん?」

おし?

『井の田一也』

「スマッシュ…」

『ははつ謝つてば

- 譲のせして…

「藝文」

ははつ木

「……それわドウモ」

『なあ、彼田とかあるんか?』

『四の隅で睨むか』

「オヤスミ」

『悪かつたつて』

めんて

卷之三

『で？ あるん？』

「おひたらかずまさみたいなんについていかんわ」

『まちのいた

「『』めんなさい、こまさん

『よし。俺とせき合つてみるべ。』

「は？」

『お前の耳腐つとんか』

『腐つてない』

『てか…『冗談やめて、キシリ』』

『ゆつたなコト』

『なんかかおり匂田にけ付け合つてみんか思たがよ』

「…」

『嫌か？』

朝、起きると。

携帯を見た…夢やないよね…彼氏いるんだよね…
うわ…恥ずかしい…変な感じ…

結局あの後、即答で付き合つと直りてしまつた…
ああ…失敗したかな…にやける顔で考える
自分が情けない…

一生の思い出に…

なるとは思わないまま、

わたしはただ浮かれていた。

第一部

初夏ノ日差シ二日、ガクラム
和将と付き合つこと早3ヶ月、

遠距離ながら毎日電話やメールを取り合ひ。

週に一度必ず遊びに来てくれるのが一番の楽しみだった。

今日は和将とバイクで海まで行く約束だった。

家を出る時、親と喧嘩したわたしは、和将の遅刻を許せなかつた。

腹の虫が悪い…と言つヤツだ。

電話がつながらない、メールも返つてこない…
何かあつたんじゃないかと不安になる

やつと連絡がつるのは一時間後のコトだ。

じわじわと暑さを感じる肌にうつすらと汗がにじむ

彼は…汗でびしゃびしゃになつてタオルを頭に巻いている
まくりあげた半袖…濃いめのサングラス。

日に焼け赤くなつた肌

かつこいい…

怒りを忘れて見とれた。『ごめん…』

「あ…」

『待つたやろ…?』

『心配した』

『本当にごめんな』

『何してたん?』

『あ…』

『言えないんや?』

『違つて…』

『いつか言わなあかんて思つてたんやけど…』

『なに?』

『…広島いかんか?』

「…は？」

『明日休みやん?』

「まあ…」

『決まりやな』

「そこに行つたら教えてくれるの?』

『見たらわかるわ』

「了解です」

『乗りやあ』

バイクは駅に乗り捨てた

いつもそうして『るらし』…盗まれないのかな

電車に乗りほぼ一時間。広島駅に着く。まだ明るいがとっくに午後6時間回っている

肌寒くなつて来た。和将は誰かに電話している

暇…知つてゐる人誰もいないんだよな…はぐれたら死ぬ…絶対野垂れ死ぬ!!

一瞬走馬灯が見えた気がした…そつと言えば喧嘩してたんやつ…
座りこんで車道を見た。

車が多い、てか通りすぎ。車の何台かは窓を開けこつちを見ている
…若い人ばつかりだ

目の前で止まつた車から男が一人出てきた。

和将はいない。電話に夢中になつてわたしのことを忘れていたらしい。

彼らはジュースをくれ、しばらく話して『るら』にドライブに誘われた話をしているうちに急に頭がもつりつとしてくる

男らがわたしに話かけてきているようだか内容が聞き取れ無い…眠

話し声が聞こえる…この声は…和将…?ビビビん遠くなる…

ど…?…?

やかましい…体に音が響く

気持ちよく眠つてたのに…

「……」

『起きたか？』

「誰……？」

『彼氏の顔もわすれたがか？』

「かずか……さ！？」

（バシツ）

「痛つ！」

『お前はバカか？』

「怒つてる？」

『なんで他人にもらつたもんを口の中に入れるんや』

「あ……いや……」

『喉が乾いたなら俺に言えや』

『電話してたやん』

『あいつらに何飲まされたかわからんのか』

『ジュー……ス……』

『なんでジュー……スで倒れるがよ』

『急に眠くな……つ……』

『ダボが……』

『あれは……』

『……あんま心配かけなやなあ……』

「はい……」

『違うやろ？』

「……」めんなさい

『よし』

どうやら自分は車の中に乗っているらしい。
しかも和将のひざまくらで横になっている
わたしの頭を撫でる大きな手が気持ちいい。

わたし達は後部座席について、あと一人誰かが前にいる。和将と話しているらしいが内容は全く聞き取れない
笑ってる。また眠くなり、わたしは意識を手放した。頭が痛い……

『おこ』

【大丈夫か?】

『起きろ!』

『かおり!』

『う……ん』

『おい?』

『……!』

『起きたんか』

「あ……」

『かなりうなれとつたがよ』

「う……」

【彼女起きた?】

『おお』

【オハヨーーかおりちゃん】

「は……誰?」

『キシヨ……』

『「ヨイツは俺の……仲間。』

【かけるです! はじめまして!】

【……つてカズよお…キシヨイは無いやろお…泣くでオレ…】

「えと…かおりです…仲間?」

『……俺の仲間の一人、あれでも一応22歳やから』

「……くそ!」

【かおりちゃん驚かないの?…マジで?…】

『かけるの童顔みてびっくりせんやつあるんやなあ』

「別に…ど…」

『どうでもこいだけか』

「こや…はは…」

【やうなの…へやつちのが凹むな…】

「違…わないけど…その…」

【ははつ冗談だよつー本当に面白こ子だねつ】

『やん?』

「...なに言つたの...」

『別につ』

【まあカズのこと怒らないであげてなつ】

【「トイツかおりちゃんをナンパしてたやつにすゞ」い勢いで殴りかかつててね】

『おい』

【一人はもう伸びてるし、もう一人も大変なことになつてよ】

【止めに入つたこつちまで殴られかけたよつ】

『やかましがに』

(ガツッ)

【痛てつ】

『ダボが...』

『かずまや...手...』

『ああ...勝手に治るがよ』

『バカ...何も殴らなくとも...』

『なんや?』

『痛そつ...皮むけてるやん...』

『バカ...ありがとう』

私が気がつくと、綺麗な寝室のベッドに寝かされていた殺風景だけど高価そうな家具が並んでいた。和将とかけるは、わたしが仲間?と訪ねると、バツの悪そうな顔でゆっくり話し始めた

どうやら彼らは広島の暴走族らしい

規模の大きなチームらしく沢山仲間がいると言つていたそして…かずまさは副頭…NO.2にあたる人物らしい引いた…?と聞かれ、わたしは少し考えた和将は好き…何をしてても和将は和将かな…あまり深く考えないわたしはその結論に異議は無く、正直に言つてくれたことにお礼を言つた

和将は微笑み、わたしの頭を撫でてくれた
わたし…和将の手…大好き…

もつと好きになれそうな気がした。

ただ、かけるはカズを見ながらニヤニヤしている
和将はそれに気づき、(ゴツ)つと頭突きをきました
それからは三人でご飯を食べ、和将らの用事にわたしもついて行くことになる

未知の世界の扉を開けるほんの始まりに過ぎないことだった

「耳が痛い…」

『あー?』

「耳痛い…!」

『ははつ…』

『そのうち慣れらや』

「その前に中耳炎で死ぬ」

(ぼすつ)

『かぶつとけや』

「前見えない…」

『高いんやから汚すなやあ?』

「かけるに売る」

『いくらで?』

『俺のプレミア付きやど?』

「…千円?」

『ひこずりまわすか』

「大切にかぶります」

『おし』

そんな会話が楽しくて周りの騒音…

もとい…バイク、車の音が気にならなくなってきた。帽子のおかげ

…?

怖い…本当に怖い…トイレに行つた帰り、いかつい兄ちゃんが喧嘩している所に出くわした。

『なんやこらー!ー!』

『ああ?ー!』

一人がすゞい喧騒で叫んでいる

その相手はものすゞくゴツい…おじ…?いや…お兄さん。

何も言い返さない…何でだろ

トイレの割れた小窓から見ているわたしは、早く終わるのを願つてただ見ている…。

大きな音がした

しばらくしてそつと覗いてみると…

大声で叫んでいた兄ちゃんがうずくまつている。

その時

…大きな人と目が合つた…

殺される?

死ぬ!ー!

しゃがみ込むわたしに気づいた大男は…『もつ大丈夫じゃけ出て来てかまんよ』

それだけ言つと、足音が遠のいていった…
急いで和将の所にもどると、遅いと怒られた

言い返す暇もなく大きな声がした

「ヤマザキ！－出でこいや－！」

『はい』

「表でころがつとアレはなんじやあ」

『目つきが気にいらないと言われまして』

「それで手え出したんか」

『いえ、これを持ってました』

〔…シャブか〕

『胸ポケットに入つていました』

〔ちつ…クソガキが…〕

〔詳しい事は後で聞くけえ、すまんかつたな〕

『はい』

『失礼します』

静まり返つた海岸ばたの倉庫の中は、声が良く響いた。

わたしは和将にの人ら誰？と聞くと

でかい方が山崎たかまさ、仲間の一人らしい。

そしてこの騒がしい場を一瞬でおさめた彼は：

加賀城大志、このチームのリーダーでN.O.－1だと教えてくれた
物腰やわらかそうなお兄さんだった

短めで揃えられた綺麗な黒髪

黒いシャツに大きめのGパン

顔は…かなりいいと思つ。

さわやか系の面構えで、…口の悪さがなかつたら…と思つと少しく
こむ自分がいた。

薄暗ク肌寒イ夜

大勢の仲間が集まるこの日を集会、または会合と呼ぶらしい。
そこに彼女達は居た

濃い化粧

濃い性格

薄い眉毛

レディース…?

逃げたい

頭の中はただそれだけだった…

和将が大志さんに呼ばれ向かつた

約五分後。

わたしはそんなお姉さん達に囲まれていた。
若い。可愛らしい。面白い。

と言つては頭を撫でくり回し、髪の毛をいじくり、化粧をしてみた
いと頼みこんで来る。

悪い人達でないのはわかる

だが…いかつい姉さん達6人に囲まれば…笑うに笑えない
その中でもリーダー核の由実さんは、かなりの美人だと思う
彼女は、5人の姉さん達の勢い余つた行為を止めてくれた
わたしの頭を撫でながら、自己紹介と自分達がいる理由を教えてく
れた。

どうやら彼女はチームの中に彼氏がいるらしく、顔を合わすうちに
仲良しになったとかなんとか
和将の…一応？彼女のわたしが気になっていたと言つ。
…もしかしがキャラそうな女だつたらシメ上げられていたそーな。

怖いって…

しかも…由実さんは…あの大志さんの彼女…なぜか大志さんの方に嫉妬感を覚える…

こんな美人を…

話をしているうちに一番年下のわたしに優しく話しかけてくれる彼女達を好きになつた

特に由実さん…!!

すべてが完璧に見える…特にEカップの乳が…わあ…でかい…番号をすごい勢いで6人と番号を交換し、姉貴分が一氣に出来た嬉しかつた。受け入れてくれたことも、対等に話かけてくれることも

全部和将が誰かと一緒に帰つてきた…

…
…
…
…
…

大志さん…!!

「この子が香織ちゃん?」

『そつ』

「…犯罪にならんか…?」

『ばつ…!…』

『そんなことねえがよ…!…』

「冗談やつてつ」

『シバくぜよ』

(バシッ)

「痛つ…!…」

「こんボケッ」

(ゴッ)

「お前のは痛いんじゃけん手加減せえゆうどるやうが…」

『じゃかあしやこんダボ!』

「…あ…の?」

「あ、ごめんなあ！」

「こんボケナスから聞いた思つけど、オレ一応頭じゃけん」

「大志つづうんや！ よろしくうなあ！」

「はあ…」

『相手にせんでかまんがよ』

『コイツただのダボやが』

「なんやて？」

「なんや！ 大志なんでこないなとこおんの？」

「由実… 彼氏に冷たくないか…？」

うちの存在見えてなかつたくせにい なんやつたら和将のアホ

タレと付き合うたらあ？

うちは香織と付き合う わつ

「だつてよ？」

『由実ちんかんべんしちくりやあ』

『こないなアホおれの手えには追えんがよつ』

「…ひちが願い下げじやあ…！」

…うちらも大変やな…

「…そつすね…」

男2人が楽しそうにじやれている姿は可愛い

その日、わたしは姉さん達に飲みに連れ出された。

かなりのハイテンションに拍車がかかり大騒ぎになつた。

疲れ果てて和将の元まで帰ると、和将の様子がおかしかつた
何かあつたのかと聞くと、ため息混じりにゆっくり話し始めた

…チームの仲間の中に薬をしている人間がいるらしい

名前が上がり次第

破門…切り捨てなければならないと辛そうに語る和将が顔を上げなくなつた。

冷蔵庫からビールを取り出すと流し込む様に飲み始めた

煙草を深く吸うと、ため息のよつに煙を吐き出す

切なくなつて、わたしは和将の頭を撫でた

辛そうな顔が少し和らいで、はにかんだよつた表情に変わった

心臓が跳ね飛んだ

顔が熱い…

『なん?』

『え?』

『酒のんだんか?』

「う…うん」

『顔赤いでっ』

(ぴたつ)

「…」

『ほっぺた熱っ』

「手え冷た…」

『つりや』

(ペ) (ひつ)

「ひやー…」

『はははっ』

『ははは…もつ寝ないや』

「…うん」

第五部

ソノ日ノ朝ハ黒イ雲ガ印象的ダッタ

AM 8:00

大きな音で飛び起きた

(ドガシャンツ)

「?！」

「…なに…?！」

『うわっ』

「和将？」

「なにしてんの?」

『こつちくんな!』

「へ…?」

『やめんかや…!』

「何…?」

『ちょ…――おい――そつち行くな…!』

(ギイ…)

「あ…?」

「ガウツ…!」

「あつ…!」

(ボスツ)

「ギンジロ…!」

「ガウウ…!」

「くすぐつたいよ…?」

「家中に上げてもらつたの…?よかつたねえ…!」

『あ…あ…遅かつたがね…!』

『…ギンジロびしょ濡れやん…』

『一緒に風呂入つとつたがよ』

「へえ…!…?」

「ちょ…裸でうろつかないでや…」

『タオル巻いてるやん』

「ちゃんと服着て」

『…一緒にに入るが?』

「絶対イヤ」

『力いっぱい拒否んなや』

『…ギンジロあとで一緒にに入るか?』

「ガウ」

『おい、ギンはオレと入るんやがなあ』

『イヤよねつ乱暴に洗われたんやる?』

「ガウッ」

『おい…』

「早く服着て来てや〜?」

『…了解』

ギンジロ…和将の家でのただ一匹の同居人。…いや…同居犬
昔道路に飛び出て来たギンジロを…バイクでハネたらしい
すぐに病院に連れて行き治療しているうちに情が移ったそうだ。
ギンジロの白い毛は今でも首すじの一部がハゲていて、そのせいか
鳴き声がかすれている

その声のシブさから銀次郎…と書いてギンジロと命名されたとのこと。

ギンジロとお風呂に入り、ドライヤーで毛を乾かしていると和将が
ギンジロの「」飯を持って来た

美味しそうに食べるギンジロを見ていると和将は

お前のエサはこっち
とキッチンを指した

…エサ?

聞き流せなくてしかめつ面のわたしの表情は、豪華な朝ご飯を田の
前に一瞬で笑顔へと変わった

これは和将が全て作つたらしく、意外な特技にかなり驚いた

しかも……わたしが作るより……おいしい。

和将の仕事は親の仕事の引き継ぎの教育を受けることからしく親の会社の元で働いているらしい。

何の会社なのかは教えてもらえないけど……この自宅は……すげいと思う。

全体的にシンプルながら……一人で住むには大きすぎるとは思つ
今日は和将も休みで、ドライブに出かけることになった
和将の言つことが理解できない……行きは車。帰りはバイク……なんで
？

お昼はチームの仲間が働いているお好み焼きの店に寄つた
扇風機が頭上でフル回転している
かつお節がたまにフワフワと飛んでいく
広島のお好み焼きに驚いた
味も驚いた

わたしのは……キムチ入りでものすごく辛い
店を出たころには唇は真っ赤だった
和将はたまに指でわたしの唇を遊ぶ
引っ張つたりはじいたりつねつたりしながらしかめつ面になるわた
しを見て笑う
でもキスなどは一切ない

わたしに魅力が無いのはわかつてゐけど
たまに顔が近くなると緊張してしまつ自分が嫌だ

その後は公園でハシャギすぎて和将が川に落ちたりそのままわたし
も引きずりこまれずぶ濡れのまま近くの古めの商店で水鉄砲や水風
船、あと大量の駄菓子を買い

一時間後にはびしょ濡れになり疲れ果て2人で駄菓子をむさぼつた
会話は絶えず続き、帰る頃には口が疲れていた「……車大丈夫なの？」

『余裕』

「あの車庫はかずまさの車庫なの？」

『似たようなもんやがね』

「…なんじやそら」

『気にするな』

「これからどう行くの?」

『銭湯行かなな』

「わあ、助かる」

『服もどうにかせなな』

「家戻る?」

『まさか?』

「じゃあ? ?」

『買つんやが』

「は?」

『あと十分』

「へ?」

…香奈さんが離れない…

あのハイテンショングループの一人…香奈さんはショッピングの店員だった

しかもわたしを見つけたとたん…抱きついてきて…離れない

可愛らしい人でなぜかこっちまで笑顔になってしまつ空氣の持ち主だった

和将が、メンズに行くから適当に見つからうとして

と言い捨てると香奈さんの目が光った

着替え十数回

撮影…何十枚

今日店長さんが居ないことが恨めしく思えた
好き放題する香奈さんでさらに疲れ、約30分。

やつと服が決まった

撮られた写真は…何も言つまい…

和将が帰つて来て…やつとわたしをいじくる手が止まつた
疲れきつたわたしの顔を見て吹き出す和将…あとではたいぢやる…

銭湯から出て新しい服に違和感を覚える

この服おとなっぽすぎなんじゃ…

急に不安になつて出るのをためらつていると和将から電話がかかつて来て

早くしろと怒られた

しぶしぶ出て行くと…わたしが驚いた

いつもと違つ…

濃い深緑色のGパンと黒い半袖パーカー
シンプルだけど…

似合ひすぎ…

和将がこっちに気づいた。

近づいて来るだけなのに緊張した

いきなり腕を掴まれ外まで引っ張られた

遅かったコトに怒つてゐるの…?

と聞いても答えてくれない

それどころか…こっちも向いてくれない…

不安になつた

外に出ると急に止まつた和将が誰かに電話し始めた
相手は香奈さんだった

服の露出がどうのこうのと話していた

露出といつても…ぴっちりとしたTシャツの胸元が広めに開いてい
るだけだ

…スカートも膝上程度の長さで…短くスリットが入つていて

ただそれだけだった

途中で電話を切られ悪態をついている和将と田が合つ
变かな

と聞くと

いや…

と短く帰つてきた

しばらく沈黙が続き小さな舌打ちが聞こえると同時に和将がパーカ

ーを脱ぎわたしに投げつけた
着とけ

バツの悪そうに言つ和将に素直に従うとやつといつもの和将に戻つた

：わたしは出すことすらできないほど魅力の無い人間らしい
時間を戻せたら…どれだけの人の涙を無くすことが出来るんでしょう…

和将の携帯に電話が入つたのが一時間前
大志さんが事故に合つた

即死だつた

病院に来るよう

電話は内容だけ伝わるとすぐに切れた

和将の顔色が変わる

バイクが病院に着いたのが30分前

前 灵安室で簡易ベッドの上に横たわる大志さんを見つけたのは十五分

泣きわめく由実さんをお医者さんが連れて行つたのが五分前：

そして今…沢山の人が駆けつけ、泣いている

暴れるように泣く人

大声で泣く人

今だに受け入れることが出来ず、遺体に飛びつく人

沢山の人の中で

和将はただ立ちつくしたまま動かない

掛ける声が見つからない

病院に迷惑がかかるとのことで

解散命令が出された

和将は何も言わないまま手を合わせ、

帰るぞ

と一言わたしに言った

家に着いたころには雨がパラついてきていた

和将は力なくベッドに座り、煙草を耐え間なく吸っていた
雨が気になりギンジロを家の中に入れてあげた。

ギンジロと向かい合い大志さんのこと思い出した
病院でかけるから聞いた話では…

薬をしている仲間と話しをして、帰る途中の出来事らしい
スピードの出し過ぎによる追突事故

頼りになるやつ

面白いやつ

憧れの対象

大きな存在

一番が似合う男

彼の話しが出る時、からず出る尊敬や賛美の言葉

全てが過去になってしまった現実は、重く深くみんなの上のしか
かつた…

雨ハ涙ノヨウニ雷ハ怒リノヨウニトチ狂ツタ空ヲ一ラム

「…かす…まさ?」

「どこ行くの…?」

『ちょっと用事』

『すぐ終わるけえ…待つててや』

「…バイクで行くの?」

『あ…』

「…気をつけてね』

『大丈夫やがよ』

「…行つてらつしやい…』

和将は急に立ち上がり

わたしの方に歩いて来た。

香織は…オレのこと好きか?

うん…、と答えると和将はため息まじりに困つたような顔をした

わたしは和将にとつて邪魔になつてゐるのかな…

和将は用事を済ます為出でていつてしまつた。

その時気づいた…

わたし和将のことに入りし過ぎた…

きつと嫌になつたに違ひない。

一度そう思うと、妙に確信めいたことに思えて来て…

ここに居るわたしがみじめに感じた…

バイバイ、ギンジロ…

荷物をまとめ、外に出ると大粒の雨が絶え間なく降り続き…広島か

ら出て行けと急かされていいる氣さえした…

バスの中では何も考へることが出来なかつた。

眠ることもなくただ流れる景色を見ていた。

家に着き、荷物を降ろす。

降り続く雨を見て、ようやく涙が出てきた。

広島もまだ雨は降ってるのかな…

そんなことを考えながら和将からきたメールを見ていた
あまり絵文字を使わない和将の飾らない文章
たまにハートが付いているとたまらなく嬉しかつたなあ
などと考えながら和将へとメールを打ち出した。

“今までうちみたいなガキに付き合わせてごめんね 大志さんの
ことでも慰めたり出来なくてごめんなさい わたしには和将を幸
せにしてあげれません 元気でね”

送信しました

携帯の画面が待ち受けに戻り約3秒後
(ブツブツーーツ!)

夜中の一時。

車のクラクションが鳴り響く。

いつまでも鳴り続けるので窓をすかし覗いて見ると…

黒いボックスカーがわたしの家の前に…

「……？」

由実さん…と…かける…ピックリして窓を全開に開けてしまった。
後悔してももう遅い。

ポストに鍵を入れっぱなし…と言ひ話しきをかけるにした覚えがある…
部屋の位置を認識されてしまった。

足音が近づいて来る

(バタン)

(ガバツ)

(ドサツ)

「由美や…」

「ばか…なんで急におらんなるん?

みんな探したんよ?!

心配したやない…

「あ…」

【由実姉が一番心配しててんぞ?】

「「「め… なさい」」

和将がなんかしたん?

あんボケナスうちのかおりになんしたん!?

【あなたのやないやれ…】

…

【「「めんなさい」】

「あの…」

「わたしが勝手に出て行つただけで…」

「和将は何も…」

【あんな… 和将今警察さんと「おんねや】

「は?」

あのバカフアミレスの中で三人に重傷おわしてんよ

「なんで…」

「もしかして大志さんの…?」

「あ…」

【警察がパクリ来るまで殴りよつたらしこんや…】

「お願い…! かおりちゃん…帰らうへ…」

【「「」がかりの家なんじや…】

やがましがね…

【すみません…】

「でも…」

「うちなんかが行つても…それに…由実さん…大志さんの「」とは…?

過ぎたバカの「」とより今はあんたの「」とよ…!
心配かけて…

「「めんなさい… わたしなんかで役に立つんだつたら… 行きまわ」

「おい…学校は?」

「休みます」

「一日くらこ変わらんてつ

【おー…】

メールを送つてしまつた後なので…和将になんと説明しようかと考
えながら車の中で由実さんにもらつたおにぎりを食べる
煙草の煙が充満している車の中、外が見えず、今どの辺りを走つて
いるのかさえわからない…高速に入つたことはわかつた。
スピード出し過ぎ…由実さん急かし過ぎ…今何キロ出てるの…?
ブレークがあまり使われている気がしない…
一度とかけるの車には乗らねえ…気持ち悪くなつてもううづつとする
頭の中そう誓つた…

バスの半分以下の時間で広島に着く

和将は朝には帰つて来るらしい…早すぎくないか…?
和将の家に入るとギンジロがかけ寄つてきた。
しおらしくわたしを見上げる様が可愛かつた。

抱き上げ、頭を撫でる

由実さん達の方を振り返るとけげんな顔でこっちを見ている。
ギンジロが和将以外の人間に抱かれてる…
珍しいことらしく、和将の犬だ。と確信づけるものになつたそつだ。
寝室の扉を開ける。

…携帯が…和将の携帯が置いてある…開いてみると…
新着メール一件

早速消した。

助かつた。

安堵の息が漏れる。

後は帰つて来た和将に謝ろう。

お腹が減つているであろう彼の為にご飯を作ろうと思いつ、キッチン
へと向かつた。

（ガチャ）
 （バタン）
 『鍵…』
 『誰があるんが?』
 『かおり?』
 『おい…?』
 『寝て…』
 『…』
 『ぶつはつ』
 『はは…なんじや…』
 『待つててくれたがね…』
 『…ありがとおな』
 目が覚めるとギンジロがわたしの腕まくらで寝ていた。
 そして隣ではわたしに抱きついて寝ているのは…由実さん…ち…
 乳が当たる…そして動けない…
 あれ…? シャワーの音が聞こえる…
 かける帰つてきたのかな…?
 どうやつて起こさないようになんに動くべきか考へて…
 がした。

（ガチャ）
 （ドスドスドス）
 （ドガチャーンツ）
 ビックリして起き上ると、そのままバスルームに向かつた…ド
 アは開け放しで…中には…裸で立ち廻くす和将と…それにしがみ
 つく…かける…
 ミテワイケナイ
 「…失礼しました」

ドアをそつと閉め、帰ろうとするとき由実さんが起きてきた。

今見ない方がいいと伝えたが、お構いなしにドアをブチ開けた。

一時間小、由実さんの笑い声はおさまらなかつた。。。

しばらく、和将とかけるはホモと呼ばれることになる。

謝るタイミングをすっかり失つたわたしは、今楽しくみんなで食事をしている。

いつ切り出そう…

考えても言い出せない…

4人+一匹でわたしの作った料理を食べている

不思議な光景に見えて来た

100%一般人のわたしが暴走族の幹部と食事……なんか面白くなつてきた

そんなことを考えてた最中。

和将の手を見た。瞬間……何かがブツリと切れた。

「和将……その手」

『あ……？』『レガヤ？』

「血まみれなんだけど」

『皮ベロつてむけたけえの』

汚い

【由実姉ひどい】

「そんなことはどうでもええやろが」

「和将……なんで手に傷なんかつけとんの？」

「わたし言つたよねえ」

「手に傷をつけるなで。」

「知りませんでしたや済ませんよ」

「ちよおこつち来なあや」

『か…かおりさん?』

(ぎゅう「づつづつ」)

『痛つ！…痛だだだ…!』

（ドスンツ）

（バタバタツ）

（バタンツ）

【痛い…】

かおり…

耳をさすりながら、かけるが和将の寝室を見つめる
その寝室に和将を引きずり込んだわたしは、和将をシバキツツ手に
薬を塗り、包帯を巻いている最中だった。

和将の手を見ていると…なぜか悲しくなつて涙が出てきた。
見つからないようにうつむいていると…和将に抱き寄せられた
急なことでビックリして和将の名前を呼ぶが、うまく言えない。
苦しい…息がうまく吸えない。

でも…混乱する頭の中でただハツキリとわかってるのは…
好き…死ぬほど好き…ずっとこうして居たいよ…
ふと、力が弱まった

和将…？

そう呼びかけると

頭の上で低い声が響く

『ごめん…』

『かおりに心配かけた…』

『最低やんな…七つも年下の女に…辛い思ひをしてしもうた』

「そんなん…」

また力が入る。

強制的に口を塞がれてしまった

『…一生大切にするけえ…』

『ずっと一緒におりてくれ』

それからはいろいろあった。

沢山の推薦により和将がリーダーになつたり。

それから数ヶ月、和将は父親の会社で昇進し、人を動かす立場になりました。愚痴も沢山増えた。

そしてわたしは家を出て、一人暮らしを始めた。

実家から少し離れた場所でバイトをしながら学校へ通っている。なぜか和将も住む。

と言い出し、家賃半分で綺麗なマンションに住んでいるのだが…和将は週に一度寝泊まりするくらいであまり意味がない。

彼なりの優しさがくすぐつたいと思う。

広島にはちょくちょく顔を出したりしているが…一番大きな変化は…かけると由実さんが付き合いだしたコトだ。

2人の間でいろいろあつたらしく…

結局かけるは大志さんを越えると由実さんに約束したらしい。…大変だ。

和将が頭になつたチームにも沢山問題が出てきた。

和将と遊ぶ時間が少なくなるのが嫌だったので何かあるたび着いていくことになつた…

後悔しても…もう遅いのに…今でも後悔して病まない事件が始まる。

眩シイ日差シが脳ヲ焼ク

殺シテ…

その一言が耳に残る。

この人達はどこから道を踏み外したんだろ？
太陽も眩しい残暑の昼下がり、和将がファミレスで殴り、重傷をお
つた元・仲間も病院を出て来る時期になつた。
仲間達に内緒でわたしを連れて、一度だけ見舞いに行つたことがある。

和将は入院費を渡しに行くと言つていたが…
本当の所心配はしているのだと思つ。

元・仲間だから。

『起きちゅーが？』

（ガラガラ）

『カズさん！？』

『おー。』

『調子どがいなが？』

『…すみませんでした…！…』

『なんや？』

『あの…』

『…手え切つたんか？』

『あ…』

『リストカットか…』

『薬は…もう止めるて決めたんです』

『俺なんかんこと心配して…雨ん中来てくれた…大志兄さん…』

『一生かけて償うて行こう思てます』

『…そか』『カズさんにもよおけ迷惑かけてしまいました…』

『かまんがや』

『あん時おつた連れらは病室別なんか?』

『逃げました』

『そあか…もう関わんなよ』

『…はい。』

和将は帰る前に何かを言いかけ、やめた。

きつと…仲間に戻つてこないかと言いたかつたのだろう。

病室を出た後、しばらく無言だった。

病院を出たころに、わたしのカバンが無いことに気づいた。

病室に忘れて来てしまった…

和将にバカにされつつも、単身急いで彼の病室へと走った。

病室に近づくと話し声が聞こえた。

電話中らしい。

病院で使うなや。。

しかたなく、終わるまでドアを開けずに待つことにした。

その時…聞くつもりは一切無かったのだが…聞こえてしまった…

『金魚』『明日の午後十時』『佐伯の家で』『3…』

途切れ途切れでしか聞こえなかつたが…確定だつた…この人は…まだ薬をしてる…

間もなく電話は終わり、勇気を振り絞つて部屋の中へ入る。何事も無かつた様な顔をして迎え入れてくれた

カバンを取り。

部屋を去ろうとすると、止めておけば良いのに電話のことを聞いておきたくなつた。

振り返ろうとしたその時…足がもつれ、派手にぶちこけた
おでこをモロに打つた

わたしが両手で額を押さえつづくまると。

彼は、大丈夫?…と心配してくれたどころか、立てる?怪我はない?と優しい言葉までかける。彼の手は暖かく、笑顔は優しかつた。お礼を言い、ドアの方へ向き直ると、彼の声が聞こえた気がした。なにか言いました?と振り向くと

困ったようににはにかんだ顔が目に映る……あう……

この表情には見境なく弱いらしい……

和将の所まで帰ると、遅いと怒られテ「コピンをくらつた

瞬間。

額を打つた痛みが蘇つた。

『そがいに痛かつたがや？！』

『おい？』

無言でうずくまつたわたしはしばらく動けないでいた。

〔数時間後〕

病院で怪我をしたわたしは由実さん達に笑い話として話されることになつた。

〔和将によつて〕

帰る途中。

あの病室の人はどんな人なのかと和将に尋ねてみた。喧嘩は弱いが、周囲に気配りの利く優しいヤツだ。

と田を細めつつ説明してくれ、薬も始めは悪い友人に進められて断りきれずに……と言つことも聞いた。

まあ俺らも良い友人つて訳でもねーがね。

と笑つていた。

どこにでもいる普通の人だつた。

その人が薬をしている……

受け入れられない現実が頭の中でぐちゃぐちゃにからまつている……

結局、和将には言えずじまい、そのまま自宅に帰つた。

その日はまるで寝れず、布団の上で「コロコロ」としているだけだった。

ムセカエル甘イ香リニ変ナ汗ガデル
忘れてた：人生で一番嫌いな日。
わたしの誕生日。

母が気合いを入れて作ったケーキ。

サイズ15号

親戚の姉が持つて来たケーキ。

サイズ8号

友達が毎年くれるケーキ。
数4個。 サイズ五号以上。
和将がくれたケーキ…一段。

：

ふざけんな。

甘いモノが嫌いなことを毎年毎年何回も言つてゐるのに。

なぜか今年も部屋はケーキだらけになる…。

気持ちは嬉しい…だがチリだつて積もるんやがよ。

後輩がケーキを持って来た時はすべて食べ尽くすまで見張られた。
胸やけ、吐き気に襲われ。ケーキをどう始末つけるか悩んだ。

かけると由実姉さん達に食べてもらおう！

暇な人。と言う条件で呼んで見た。やる気でかけると由実さん達は
わたしのマンションまで来た。酒を持つて…

宴会が始まる。

減つて行くケーキに喜びを感じてると暴れん坊将軍のテーマソン
グが聞こえた。

かけるが携帯をいじると曲は止まつた。

なんとも言えない趣味だと思う。

かけるの笑顔が深刻な表情に変わつた。

急に立ち上^がるとわたしを呼んだ。

かけるの方へ向かうと、和将が聞きたい「トがあるからわたしを広島まで連れて帰つて来てくれとのこと。かけるが急いで？！と急かすので何かあったのかと思ふそのままかけるの車に乗り込んだ。

数時間後和将の自宅に着き呆然とする。

『誕生日おめでとう！』

【よ…よかつたやん？！】

『もつと嬉しそうな顔せえや』

「騙したくせに」

『普通に呼んだら由美さん達取つて来いひんやん』

「…で？！のクソ、テカイケーキは？」

『！の前のじやしょぼすぎやん』

『喜べや』

「テカすぞ…」

「誰が食べるの…」

『お前』

「ふざけんな

『ああ？！』

「なん？」

「まさかとは思うけど」

「わたしが甘いモノ嫌いなの忘れない？」

『は？！』

「クソばか…」

『つせやん…』

久しぶりに和将の手料理を満喫していると、かけるが向の氣なしに話題を振つて来た。

あいつ今何してんだろうなあ

は？

ほら。あの…

ああ。あいつか。

さあな……全然連絡取つてねえが……わたしは“あいつ”が誰か想像が付くと同時に責やめた。病院での電話の内容を話すの忘れてた……しまつた。言わなくちゃ……でも……！和将はなんて思つ？……怒るかな……怒るよね……

……なんて言おう……

彼まだ薬してるみたい……？

悪い仲間とまだ連絡取つてるっぽいよ……？

病院で立ち聞きしちゃいました……？

……考えがまとまらない

そんなことを考えながら、フォークでグラタンを無意識にかき混ぜていた。

和将がわたしを呼ぶ声がしだいに大きくなる。
かおりつ……！……！

ビックリし過ぎてフォークを落としてしまつた。
ふとグラタンに皿をやる。。

和将の自信作の見目麗しさは、後形も無く消えてしまつていた。

『どしたんだ』

『顔色悪いがよ』

『風邪でも引いたんが』

『あ……いや……』

【気持ち悪いの？】

【寝室行く？】

「大丈夫……」

『なんや、次は何でなやんじんや』

「……つ！」

「悩んでなんか……！」

【…嘘つけないんだね…】

『隠しきれんもんを無理に隠せりかねるからやが』

「…あ…その…」

『なんや』

『うんこか?』

「…あ?」

『なんや我慢しとんやねえがや』

「違うつつの」

「じ飯中に汚い。」

「くそばか」

『自分だつてクソゆうたやろナつ』

「微妙に意味が違うの…」

『クソはクソやがよ…』

『それ以上になにがある…』

『クソクソ連呼すんなバカ…』

「かけるも何か言つてよ…」

【…うんこ我慢したら体に悪いよ?】

「ありがと…殺意が芽生えたよ…」

【顔笑えて無いよ…】

『うんこの話しまだするんがや』

「あなたのせいでしょう」

『…ゴメンナサイ』

後日談、その時わたしの目の中に2人は恐怖と危機感を感じたらし
い。

それはわざやかに語り次がれていくことになるが、まだまだ先の話
しである。

その日は、田畠を感じるほど一瞬で時間が通り過ぎて行くよつて感
じた。

…そして、悲しい人達の行く末を田の畠たりにしてしまつ。
今でも脳裏にこびりついて離れ無い恥まわしく辛い思い出が…良く

晴れた星空の下で蘇つた。

わたしの知つてゐることはすべて話した。

病室でのこと…立ち聞きしたこと…

でも、和将は信じてはくれなかつた。

あのリストカットは薬をやめる為では無く…あくまで和将らを騙す手段だつたのだろう。

とかけるは言つた。

…和将は何も言わない。

かけるは、確かに「行こう。」と和将とわたしを連れて佐伯と言つ人の家へと向かつた。

駐車場には元・仲間の彼の車。あいつやつぱりまだ来てたんだね。中に入るぞ。

かけるが先陣を取りインター ホンを押し家の中へと何の迷いも無く入る。

それに無言で続くわたしと和将は…最悪の出来事を予感しては、有り得ないでほしいと願つた。

一階には誰も居ない…二階へとかけるの足は向かい始めた。階段を登つていると、不安と緊張で足が鉛のように重くなる。ふと急に和将がかけるを呼び止め。自分が先に入ると言つた。和将の決意にかけるは素直に従つた。

その家は静かだつた…誰も居ないかのような静けさ…音がしないのだ。

彼達が居るハズの部屋からも…
和将がゆつくりとドアを開ける。

ドアが開くに連れて視界も広くなつていつた。

そして…想像していたモノより何百万倍も生々しく冷たい現実がそこにはあつた。

お前！――

病室で会つた優しい彼は

跡形も無かつた

ガリガリに痩せコケ、

虚ろな目は空をただ見つめ、

口から：いや：穴と言う穴からいろいろんなモノが垂れ流れ

体のあちこちに切り傷があつた。

血のベツトリついたナイフが佐伯と言う男の足に刺さつていた。

そんな中、一番に口を開いたのは和将だつた。

周りのラリつた男達を足で押しのけ彼の元へ駆け寄つた。

肩を揺さぶり、頬をはたき、数えきれないほど彼の名前を呼んだ。

彼に聞こえるように：大声で何度も：何度も：

彼の焦点の合わない目が和将の方へ向く。

一言：ただ一言。

精一杯絞り出した彼の言葉に、私の目からとめどなく涙が溢れた。

『口…ロシテ…』

『なんでや…』

『大志に人生かけて償うんと違うんが…』

『おい！…こっち向けや…』

『なんでや…？』

『なんで…』

『負けたんや…』

『ダボが…』

今にも折れて崩れそうな彼の体を抱き寄せ…彼は何かを酷く我慢していた…

かけるが呼んだ救急車が彼達を連れて行つた。病院までついていかないの?

と聞くと無言で首を横に振つた。

和将の家に着くと、ギンジロの相手もそこそこに和将はリビングへ向かつて行つた

ソファーに座り、何か考えながらぼーっとしていた。

いや…もしかしたら何も考えていなかつたのかも知れない。わたしにできること…まず汚れてしまつた和将に風呂を勧め、着替えの準備をした。

バスルームまでもつて行くと、ドア越しに和将が話しかけてきた。

『なんであいつは俺に何も言つてくれんかつたんやろがなあ』

『大志には言えて』

『俺には言えんがか…』

『大志とは器が違うんもわかつとおがよ』

『それとも…仲間やのうて普通の友達やつたら…』

『ちょっとは違うかつたんがね…』

『…かず…』

…ゴメンナサイ

「わたしが忘れてさえ無ければ」

「もつと早く助けることができたかもしれないのに」

「あんな…ことにならなかつたかもしけなかつたのに…」 「ごめんなさい…」

「ごめんなさい…」

「ごめ…つ」

『かおり…』

『ちょおこつち来い』

！」

(グイツ)

(ハタシ)

卷之三

「シノヤワ」止めて

『お前のあかざやが』

「？」

『お前のおかげで俺はあいつが生きとるうちに会えたんやが』

『謝ることなんか一個も無いんやが』

アーヴィングの死

۱۰۷

「泣いてもかまんよ」「かおり？」

「シリヤーでひじょ濡れだし…わたしのコントラクトも流れちやつたし…？」

一
大丈夫

見えないよ」

田舎の言葉ばかりで、内容を一遍も聞いていない。

和将の様子や…わたしの体調を心配してくれて、もう大丈夫だと伝えると、ため息と同時に

心配かけ過ぎ

と
叫ぶれ
俺がいたね！と讃めてくれた

裏のあだ名：

鉄製蜘蛛の巣

捕まつたら...逃げる」とは出来ない。

あの日の和将の記憶はわたしの中で一部だけ消えたことになつてい

る。

そう、バスルームの出来事はあの日のシャワーの水と一緒に流れて
行つたのだから。

灰色ノ空ガ眩シイ朝ダツタ

暖かい。

目が覚めるとあなたが居た。

いつ起きたのか、漫画を読んでいる。

腕枕をしてくれて、彼の胸の中で見る夢はとても幸せだった…気がする…

『…起きたがか?』

「んー…」

『ミダレ fu いとけ?』

「んー…」

(ぎゅ…)

『おい…』

『俺の服…』

「ー…」

『寝んなや…』

『服…冷たい…』

昼過ぎ。起きると隣には冷たい笑顔をした和将が…怒つてないと口では言つくな…目が笑つてない

顔の筋肉だけで笑うその様は…私をびびらすには十分で…

…謝ひ…と決心するまで時間がかかった。

ドキドキしながら近づいて…後ろから抱きしめてみる。

怒つてます…?

と聞くと、

どう思う?

と帰ってきた。

彼の標準語に怯えた。

『ごめんなさい…つーと力一杯謝ると

和将は近くにあつたテーブルに飲みかけの珈琲を置いた。

と、その時。急に自分の体が浮いた、びっくりして暴れることがやがしぬかつたが。

寝室まで一直線に向かう彼に迷いは無かつた。

寝室のドアを乱暴に開け、ベッドへと放り出された。

勢いよく落ちた私はしばらく頭を回していた。

『…かおり』

「…んあ…」

『俺の顔見えちゅうが?』

「う…」

「…！」

「ひえ…？」

『なん?俺の顔になんかついとうが?』

「…違つ…！」

「や…近い…！」

『黙つてみい?』

「へ…?」

『…し…』

「…つ…」

(ちゅうつ)

「…！…?」

『顔…赤いど…』

「な…?…！」

『これぐらいで真つ赤になつちゅうが…先が見えながなあ』

「…先?」

『そ。先。』

(ぐこつ)

(ちゅ…くひゅつ)

「つー……ー?」

(ヌルッ)

「ー……ー!」

(どんづーー)

『…痛つ…』

「ばつ…ー!」

「ばかあ…」

…

『やべ…』

和将は部屋を早足で出て行つた。

私の体に残つた恐怖感と…まだ未体験だつた感覚はなかなか消えなかつた。

しばらくして私も部屋を出たが、和将の姿は無くホッとした自分が居た。

携帯を開くと由実さんから着信があつた。

かけ直すと、遊びに来ない?と誘われた。

由実さんの自宅へと向かう足取りは早足で、どこか和将の家から逃げるような気持ちに後ろめたさがあつた。

それでもいつもより早く着いた由実さんの家…今更家には帰りたくない気持ちが膨れ上がり…今日のことがショックで…頭がグチャグチャで…由実さんのマンションの前でしゃがみ込んでしまつた。…なにしてるんだろ。そう思い立ち上がるのに十分は必要とした。インター ホンを押す。一度二度押してみるが出てくる気配がない。

…トイレかな…?

ケータイに電話してみた。

通話中だよ…

気づかないのかな…ドアを押してみると開いていた。

不用心極まりない

そつとドアを押し開き、由実さん?と呼んで見る。

するといきなりリビングから由実さんが飛び出した。
いや…飛び出て来た…かな?

香緹？

「…おじやもつておや」

うんこ

早く入りな

卷之二

曲実さんの部屋は可愛い。

ぬしくるみかキチシと並んでいたり、

由実さんの拳動が…不信だ…

お茶をこぼす

机の角で足をぶつける
ソワソワと落ち着かない。
ケータイをチラチラと見る。

「…和将から連絡がありました?」

一瞬その場の空気が止まつた。気がする。

「しかも今日のこと…全部知つてたり…」

「なつ…なんでわかつたの?」

「由実さん…拳動不審でしたよ?」

…やつぱり急には香織相手に秘密は無理よね…
つむかは香織の口から聞こいつて思つてたんよ?…

「…和将はなんて…?」

…やつちやいけなことしてしまつたつて凹んでるみたいよ?…

「…くー…」

香織は…その…嫌やつたの?

「…キスですか?」

…ハツキリ言つね…

「嫌…つて訳じやないんですよ…」

「恥ずかしいんですね…」

全てが初めてのことやもんね…

「私の…想像より…」

「本当のキスはなまめかしかつた…です」

怖かつた?

「…はい」

和将が?

ベロちゅーが?

「…つ…」

「…どつちも…ですね…」

「急にうちの知らない男の人になつた気がして…」

「怖かつた…です…」

しづらく述べをして居ると、由実さんのケータイが鳴り、電話に出た由実さんが顔を青くして絶句した。

そして…私に向かつて、…落ち着いて聞いて?と、念を押す。
何だる。由実さんの言葉を待つ。

ゆっくりと彼女の口が開いた。

和将と香織ちゃんが…エッチしたって話が…
チームの中で広がってるみたい…

「…はい？」

今日和将に呼び出しがかかるよ…

「…なんで？」

「…でかエッチしてないんですけど…」

香織わ…今チームの中で何て言われてるか知ってる?

「…？」

チエリーちゃん

「…？」

「…？」

「普通女に使いますか?！」

まあね…

「…最つつ悪ですね…」

まあ…それを汚したらしい和将は…

みんなに真相を聞かれるみたいね…

「…汚されてないです…和将は一応私の彼氏なんですけど…なん
で…」

…じぶちゃんね…

「…？」

まあ…いざれ分かるでしょつ

家に帰る。

和将は居なかつた。チームの所へ行つたのだろうか…
ギンジロに「お飯をあげると、じょりくテレビをぼーっと眺めていた。

P・M10・00

遅いな…

さつきから時計ばかり気にしている。

…これって……

「付き合う前の…あの夜に似てる…」

和将のことが気になつて…気になつて…眠れなくて…
結局朝方にワン切りみたいなことしちゃつたんだっけ…
ただ声が聞きたくて…

でも結局私寝ちゃつたんだっけ…

それから…それから…

和将は電話を何回もかけ直してくれた…それで…付き合うつて話になつて…

和将に逢いたい…

しばらくうずくまつていると、インター ホンが鳴つた

帰つて來た？！

急いで玄関を開けた…そこには…

最近チームに入つた新顔の人達が居た。

須藤

中川

鈴村

…もう一人の名前が出てこないや…

「あの…和将はまだ帰つてません…」

《知つてるよ?》

《今香織ちゃん…一人だよね?》

「…はあ…」

中川の話方は子供扱いされてるようで腹が立つ。

次に名前がわからない人が話かけてきた。

《これが和将の女?!》

《マジ可愛いーじゃんつー》

…きしょい…

頭悪そうな喋り方でジロジロ見て来る。あの2人は後ろで何か話してゐる…

急にお腹を殴られた。

痛みが体中に一瞬で広がった。

…気が付くと私は家の寝室で寝転がっていた。

…ただ…衣服を身につけてはいなかつた。

下着だけの姿で起き上るとお腹に鈍い痛みがあつた。

訳がわからない。

霞む目をこすりながらぼーっとしていると、ドアが開いた。

『おい』

『起きたぞ』

その声と共にさつきの男達がゾロゾロ入つて來た。

『香織ちゃんつて和将とまだやつてないんだろ?』

『俺らに香織ちゃんの処女ちょーだい?』

「…はあ…?」

…目が霞む。

こいつらの声が響いて聞こえる。

『ああ。あまり動かない方がいいかもね』

『こんなの打つちゃつてるし』

目の前には注射器の中にある螢光色の液体。

『体熱いでしょ?』

『俺らが冷ましてやらなきやなあ?』

…笑つてる…

こいつらが言つてゐる言葉がわからない。

頭が…重い。

その時、急に私の体がベッドに押さえつけられた。意識が驚きと共に戻る

暴れた。

必死で抵抗するが男達の力にはかなわない。腕を押さえつけられさらに薬を打たれる。

体が過剰に反応した。

泣き叫んだが、呼びたくない名前があった。

和将…

ここからの前で口の名前だけは口に出したくなかった。

体が熱い。頭が…意識が飛びそう…

和将…どうしてこの…

逢いたいよ…

苦しいよ…

どう…?

助けて…かすおれ…

目が覚めると…病院のベッドに寝ていた…

右手に感触がある…

暖かい…

…かず…?

『……』

『香織…!』

『起きたんか…』

『どうか痛いとこないか！？』

『氣持ち悪くないか？！

眞髪で でもヨリか立派な顔で話がナビヘ

『どうか痛いか
！？

「ん、大丈夫？」

『このままずっと起きたんかと思つた…』

かす

重い鎌の刃が三を利刃に向けて差し伸べた

「おがえりなさい」

少く御等がおこなふ方一派

が少し震える

だいぶ力も戻ってきた。

その分強く和将を抱きしめた

卷之二

卷之三

その後は大変でした。レディース！？の姉さんらが泣きながらお見舞いに来たり。その時は由実さんも泣いていた。他にも仲の良かつた人達が次々とお見舞いに来てくれた。

たた：あの日以来和将が来ない
仕事が忙しいのかな、と諦めていた。

そして、1ヶ月後、退院した。

由実さんが迎えに来てくれたが、車の中でもあの時の話は出なかつ

六

電車を使って私の自宅に戻った。

鍵を開けると、広い空間が寂しく思えた
実家の方に帰ることにした

実家に着くと、

元私の部屋に入り、殺風景な床に寝転がつた。
あの日のことを思い出すとすると、途中から記憶が無い。頭が痛
い。

思い出すことを諦めて窓から空を見上げた。

一時間くらいそのままぼーっとしていると、玄関から音がした。
(バタン)

無視を決め込むと、階段を物凄い勢いで駆け上がる音が聞こえた。

…お母さん？

ドアが轟音を立てて開かれた。

そこには

和将…?

…和将！？！

ビックリして勢いよく起き上がった。

そこにはスーツが着ぐずれて汗だくだくの和将が立つて壁にもたれ
かかっていた。

『なんで…』

『こつちに帰つてきとんび…』

「へ…？」

『なんで…！』

『俺んところに帰つてこんのぞ…！』

「いや……」

「忙しいのかなって思つて……」

『「ん……つひとつ』

『「ばか……！」』……帰るわ』

「……へ？」

『「ほらつ』

「……ひやつー？」

かつがれたまま階段を降り、家を出で、前に停めてある和専の車に押し込まれた。

広島に向けて真っ直ぐ進む車の中で、気になつていた話をしてみた。

「……嫌いにならないの？」

『「あ？」

「だから……もう処女じゃないから……」

『「なに？」』

「へ？」

『「今……なんて？」

「だから……つひとつ」

『「お前はまだ処女やべ？」』

「……なんで……」

「うち……確かあの時……」

『「記憶が無い』

『「違つがや？」』

『「え……うん……」

『「お前やられてねーがよ』

『「新人の一人がゲロつたが』

『「あの日噂流して俺を家から離れさせたこと、目的は好きな女を自分らのもんにしよーとしたこと』『今そいつらが香織の所へ向かつたこと。』

『「全部話して……助けに行つて下さって土下座したがよ』

『……だから間に合えた……』

「……」

返す言葉がない

ただ……肩の力がドツと抜け、涙が溢れてきた。

我慢してた分。一気に泣きじゃくつてしまつた。

その間……和将はずつと肩を貸してくれた。

和将の家に着くと、一本のビデオテープがおいてあった。

香織

とだけ書かれてある。

和将がそれを私に渡した。

处分はお前が決める。

そう言い残して風呂場へ向かつた。

……撮られてたんだ……あれ……

なんとなく再生してみた。

そこには、裸の私が暴れています。

男達が私の体を押さえつけて……

注射を……

あれ？

男が一人のけぞつて倒れた……

大事であろう所を押さえて……

そして……私から見て右側の男も……

そこでドアが開き和将達がなだれこんで乱闘……

あの2人は…？

ビデオを巻き戻してみた

そこで和将がお風呂から出て来て、丁度問題の場面。

和将が一言。

『えげつないな』

…

「もしかして…？」

「これ」

「私がやつ…？」

『あれは不能決定やがね』

「…嘘…」

『俺にはやうんじよ…』

「！？」

「しませんつ…」

『じゃあ…俺は番纏襲つてえんや…』

「やつ

「それは…つ

『いかんがか…？』

「その…」

『嫌？』

「…

『嫌じや…ない…』

『じゃあ…』

(ちゅうひ)

「…

この後の事は『想像にお任せします…』
でも、この時が一番幸せでした。

長くつたない文章に由を通して頂いた貴方様、本当にありがとうございました。

よく由を休めてあげる事をお勧めして、後書きとさせて頂きます！

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1028a/>

逝きたい人・へ

2010年10月22日00時15分発行